

2008 年 9 月 28 日

第一次大極殿院西面築地回廊の調査

独立行政法人国立文化財機構

奈良文化財研究所都城発掘調査部（平城地区）

1. 調査の目的

来たる 2010 年をもって、平城京は遷都 1300 年を迎えます。この遷都 1300 年に向けて、大極殿院正殿だいくでんいんの復原をはじめとした様々な計画が予定されています。また、平城宮跡の整備は 2010 年以降も継続され、そのなかには第一次大極殿院の築地回廊の復原も案のひとつとして盛り込まれています。

そこで、当研究所では、築地回廊ついきかいろうの復原に先立って回廊の発掘調査を終えて、その全貌を明らかにすることとしました。すなわち、今年度、南面築地回廊（平城第 431 次調査）の調査を皮切りとして集中的に回廊を調査することにしました。

2. 既往の調査概要

（1）大極殿と築地回廊

第一次大極殿院は朱雀門すざくもんの北約 500 m の位置に南端の南門があります。現在復原整備が進む大極殿を中心とする施設で、築地回廊によって囲まれた南北 318 m、東西 178 m の区画です。ここでは天皇の即位、元日朝賀、外国使節との会見など国家の重要な儀式がおこなわれていました。奈良時代後半になると、称徳天皇によって宮殿「西宮」として利用され、さらに平安時代初頭には平城太上天皇の居所として用いられていたと考えられています。

さて、この回廊は、東面と南面については全部分が発掘調査されており、西面でも大半の調査が終了しています。それらの調査成果から、築地回廊の基壇の幅は 12 m で、中心に築地をつくり、その両側に礎石建ちの柱をたてて屋根を支えた区画施設であることが判明しています。棟までの高さは約 7 m と推定されています。また、築地回廊の内側には円礫を敷き詰めた雨落溝あまおちみぞがともない、区画内部は広大なバラス敷となっていることも明らかとなっています。

（2）築地回廊の変遷

これまでの調査によって、第一次大極殿院の築地回廊は大別 3 段階の変遷をたどっていることが明らかになっています。

奈良時代前葉 和銅元年（710 年）、平城京に遷都します。第一次大極殿院は朱雀門の北 500 m の場所につくられました。四周を高さ 7 m の築地回廊で取り囲まれ、その範囲は南北 318 m、東西 178 m となります。

奈良時代中葉 天平 12 年（740 年）、聖武天皇が都を恭仁京に遷します。それにともなって、正殿などの建物は解体され、東面・西面築地回廊も解体して掘立柱塀ほったてばしらべいにつくりかえられます。その後、天平 17 年（745 年）には平城京に都がもどるとともに、掘立柱塀は解体されて再び築地回廊がつくられます。

奈良時代後葉 天平勝宝 5 年（753 年）以降、第一次大極殿院は解体され、東方に新しい大極殿（第二次大極殿）が建ちます。いっぽう、第一次大極殿院の跡地では「西宮」と呼ばれる宮殿が造営されます。このとき、南面・北面築地回廊を内側へ移動して、南北 186 m に区画を縮小します。

3. 調査の成果

（1）検出した遺構

< 築地回廊と掘立柱塀 >

築地回廊にかかわる遺構のうち、築地と礎石もせきについてはすべて後世の削平が深く及んでいたために、今回の調査では確認することができませんでした。しかし、東雨落溝が良好な状態で認められ、複数回つくりかえられていることが明らかとなりました。また、奈良時代中葉に築地回廊が解体されて掘立柱塀につくりかえられますが、その掘立柱穴を検出することができました。そのうち 3 基の柱穴には柱根が残っており、柱の沈下を防ぐために礎板そばんとして磚せんや瓦を使用していることがわかりました。

築地回廊の基壇 これまでの調査により、築地回廊の基壇は性質の異なる土を層状に搗き固める版築工法はんちくで築かれたことが判明しています。また、場所によっては基礎となる地面をいちど掘り下げ、その内部から版築層を積み重ねていたことも知られています（掘込地業）。基壇の幅は約 12 m で、基壇の外装には凝灰岩の切石を用いていたようです。しかし、後世に削平されているため、基壇の積土をわずかに確認できるのみでした。

築地と礎石 築地回廊の基壇の上には、中心部に幅 1.2～1.8m の築地がつくられ、その東西両側には礎石建ちの柱が立っていました。しかし、基壇とともに後世に大きく削平されてしまったために、今回の調査ではいずれも確認することができませんでした。

東雨落溝（432・436次） 調査区の東端で、礫を詰めた南北の溝を確認しました。これが築地回廊にともなう内側の雨落溝です。よく観察すると、溝の東西両端の礫はきれいに直線状にならべられていて、溝の幅を示す見切り石として機能していることがわかります。

この雨落溝は、層位的な関係から、まったく同じ場所で2回つくりかえられていることがわかりました（図8参照）。それぞれに礫の大きさなどが異なり、もっとも古い東雨落溝1は直径10cmの礫を見切り石としておき、その内側である溝の中心部には直径2cmの非常に細かな礫を詰めています。横断面形が溝らしく「凹」の字形になっています。その後、この細かな礫の上に見切り石と同じ大きさの礫を詰め直して、東雨落溝2としています。したがって、溝としてのくぼみはなく、ほとんど平坦な状態です。そして、もっとも新しい東雨落溝3は、直径5cmの礫を用いています。これらのつくりかえは、奈良時代前葉～中葉におこなわれたものと考えられます。

なお、西雨落溝は後世の削平のため、今回の調査では確認できませんでした。

掘立柱塼（432・436次） 調査区の西半部で検出した南北方向の塼。4.5m間隔で柱穴が並び、20基を確認しました。そのうち3基の柱穴には柱根が残っていました。柱根は直径40cmほどの丸柱で、根元近くには手斧による加工痕が明瞭に残っています。また、柱の下には磚が6個並べ置かれていて、柱と磚の間には小さく打ち欠いた瓦を楔のように差し込んでいました。こうした工夫は、柱の沈下を防ぐための古代の技です。奈良時代中葉。

<築地回廊の解体>

築地回廊の解体にともなう遺構をいくつか確認しています。解体用の足場の柱穴、基壇外装の凝灰岩を抜き取った溝、回廊に使われていた瓦を捨てるための穴などです。

南北溝1（436次） 調査区の南半部で、東雨落溝の西側に接するように検出した溝。その位置関係から、築地回廊の基壇外装の凝灰岩を抜き取った溝と考えられます。

足場穴（436次） 東雨落溝の東1.5mのところ検出した穴。南北に3基確認しており、その位置関係から、築地回廊を解体するためにつくった足場の柱穴と考えられます。奈良時代後葉。

土坑1（436次） 東雨落溝の西側で検出した遺構。部分的に東雨落溝を壊しています。築地回廊に葺かれていた瓦を中心として、土器や基壇外装に使用されていた凝灰岩などを捨てた土坑。

瓦だまり（432次） 調査区の北東部に分布する瓦混じりの土層で、バラス敷を覆っています。これらは築地回廊の解体時に廃棄された瓦で、奈良時代後葉に属します。

<バラス敷と暗渠>

西面築地回廊の東側で小さな礫を敷き詰めている状況を確認しました。それは、大極殿院の内部、すなわち大極殿の前面が広場として利用されていたことを示しています。また、大極殿院内部の排水を外部（西側）へと流す暗渠も見つかりました。遺存状況は良くありませんが、本来は凝灰岩の切石で組まれた立派な溝であったことがうかがえます。

バラス敷（432・436次） 東雨落溝の東側で直径2cmの細かな礫を一面に敷いています。大極殿院の内庭部分、すなわち広場と考えられます。奈良時代前葉～中葉。

凝灰岩暗渠1（436次） 調査区の南半部で確認した東西溝。埋土の中には凝灰岩の破片が含まれているので、元来は凝灰岩の切石で組まれた暗渠であったのでしょうか。この暗渠は築地回廊を横断して、東から西へ排水していたと考えられます。しかし、その後、凝灰岩は抜き取られてしまったために、現在はそれを見ることはできません。奈良時代中葉。

凝灰岩暗渠2（436次） 凝灰岩暗渠1とほぼ同じ位置につくられた東西溝。底石と側石ともに凝灰岩でつくられています。そのほとんどはすでに抜き取られてしまっていますが、部分的に底石と側石が残存しています。抜取溝の中には、抜き取る際に割れてしまった破片が取り残されています。その性格・機能は凝灰岩暗渠1と同じと考えられます。奈良時代後葉。

<その他の遺構>

必ずしもすべての遺構の性格や年代がわかるわけではありません。ここでは、そうした詳細が不明の遺構をまとめておきます。

土坑2（432次） 調査区の東半で検出した南に下降する矩形の段差で、西端は築地回廊の基壇東端にほぼ接します。同様の段差は東面築地回廊でも確認されており、大極殿院の広場を横断する段差である可能性があります。

南北溝2（432次） 調査区の南部で検出した南北方向の素掘り溝。東西畦より北側では検出していないため、この箇所東折するものと考えられます。溝の埋土には瓦を多く含みません。奈良時代後葉。

（2）出土した遺物

土坑や掘立柱穴から多くの瓦や少量の土器が出土しています。興味深いものとして、掘立柱穴で礎板として使われていた磚や瓦があります。磚は長さ30cm、幅15cm、厚さ8.5cmで、重さは6.5kg。どれもほぼ同じ大きさをしており、規格性の強いものです。また、瓦は熨斗瓦を主として、丸瓦や平瓦を適当な大きさに打ち欠いて使用しています。おそらく、築地回廊に使用していた瓦を転用したのでしょうか。

もうひとつ注目すべき遺物として、平城宮跡では初めての出土となる塼仏があります。築地回廊を覆う土層から出土しており、その土層自体は中世～近世の時期のもので

塼仏の大きさは、縦7.7cm、横4.5cm、厚さ2.3cmです。この破片は十二尊連坐塼仏の一部で、本来は如来坐像を三段四列に配したものです。如来像は高さ3.4cmで、蓮華座の上で結跏趺坐しています。また、火焰で縁取った二重円の光背を背負い、頭上には垂飾を下ろした天蓋をもちます。

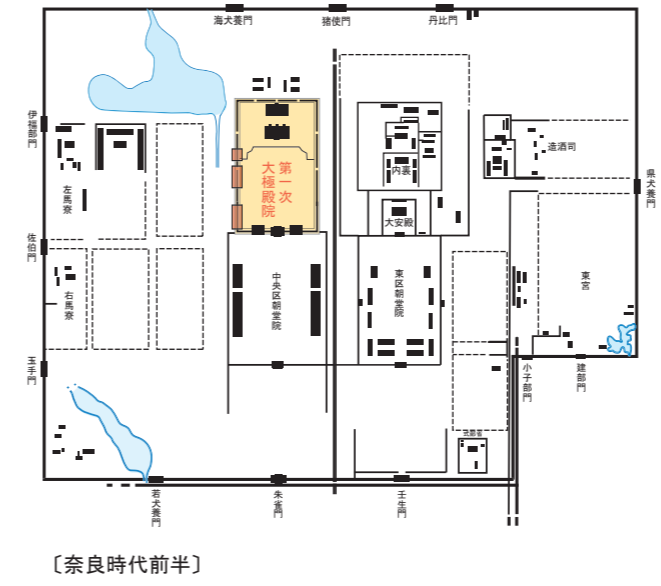
こうした像容は、奈良県桜井市山田寺跡から出土した十二尊連坐塼仏によく似ており、像高などの大きさもほぼ同じです。したがって、これらは同じ原型からつくられた可能性が高く、その製作時期は7世紀後半にさかのぼると考えてよいでしょう。

残念ながら、この塼仏がなぜ、どのようにして平城宮のこの場所に持ち込まれたのかはわかりません。が、平城宮内でおこなわれたであろう仏事と何らかの関係をもつものかもしれません。

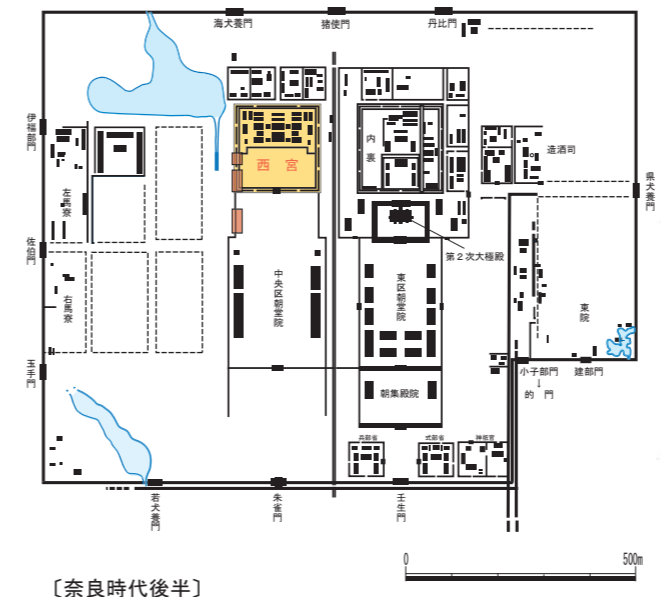
4. 調査のまとめ

今回の調査成果は、下記のようにまとめることができます。

- ① 今回確認できた凝灰岩暗渠（436次）と掘立柱塀の門（437次）は、過去の調査で、東面築地回廊の対称位置でも確認されています。すなわち、第一次大極殿院の築地回廊が東西対称につくられていることを再確認することができました。
- ② 築地回廊にともなう東雨落溝を良好な状態で検出することができました。さらに、それは2回つくりかえられており、それぞれ礫の大きさなどが異なることが確認できました。
- ③ 南北方向の掘立柱塀を検出し、礎板として磚を用いていることが再確認できました。いっぽう、東面の掘立柱塀ではこのような工法は認められていません。すなわち、西面の掘立柱塀にのみ丁寧な仕事が施されていることとなります。このことから、軟弱な地盤に柱を立てる場合、柱の沈下を防ぐ工夫を施していたことがわかります。
- ④ 平城宮跡で初めて博仏が出土しました。その意義を明らかにすることは今後の課題ですが、貴重な一例であることには違いありません。



【奈良時代前半】



【奈良時代後半】

図1 平城宮の全体図

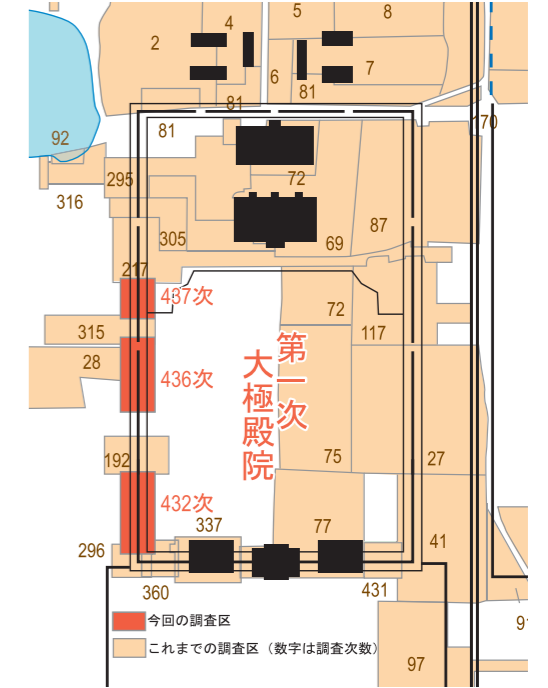


図2 第一次大極殿院と今回の調査区

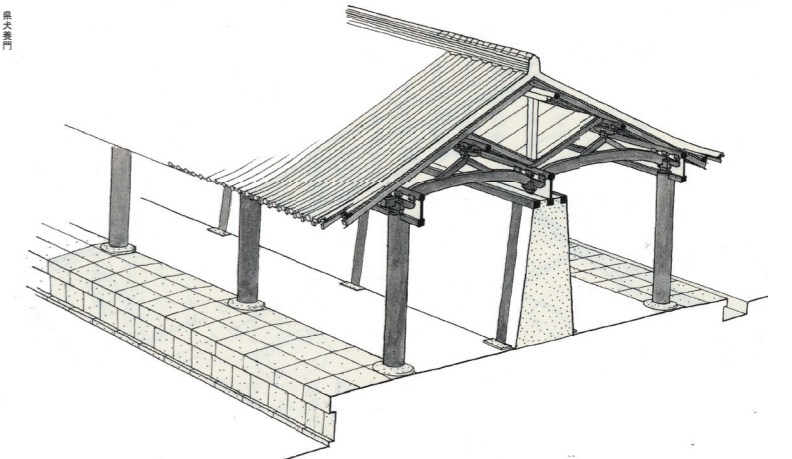


図3 築地回廊のイメージ

(宮本長二郎 1986『平城京』草思社より転載)

現地説明会のご案内を電子メールに切り替えております。
ご希望の方は、お名前・ご住所・メールアドレスを下記アドレスまでお送りください。
Eメールアドレス heijo@nabunken.go.jp

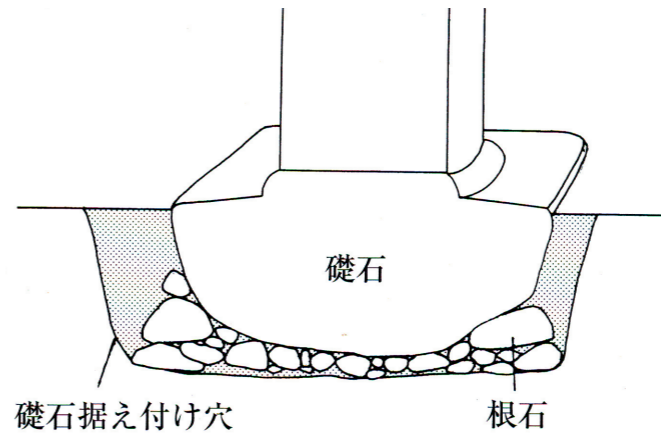


図4 礎石の据え付け状況 (模式図)

(奈文研 2003『古代の官衙遺跡 I』より転載)

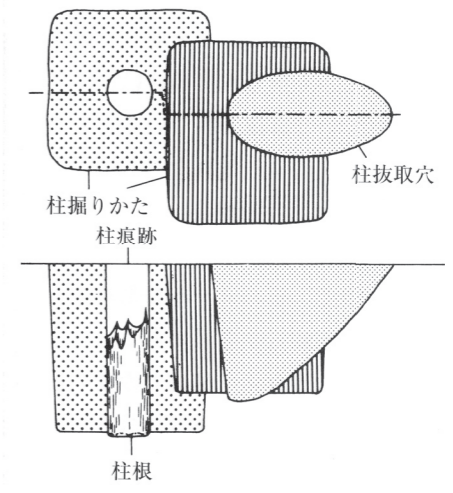


図5 掘立柱と柱穴 (模式図)

(奈文研 2003『古代の官衙遺跡 I』より転載)

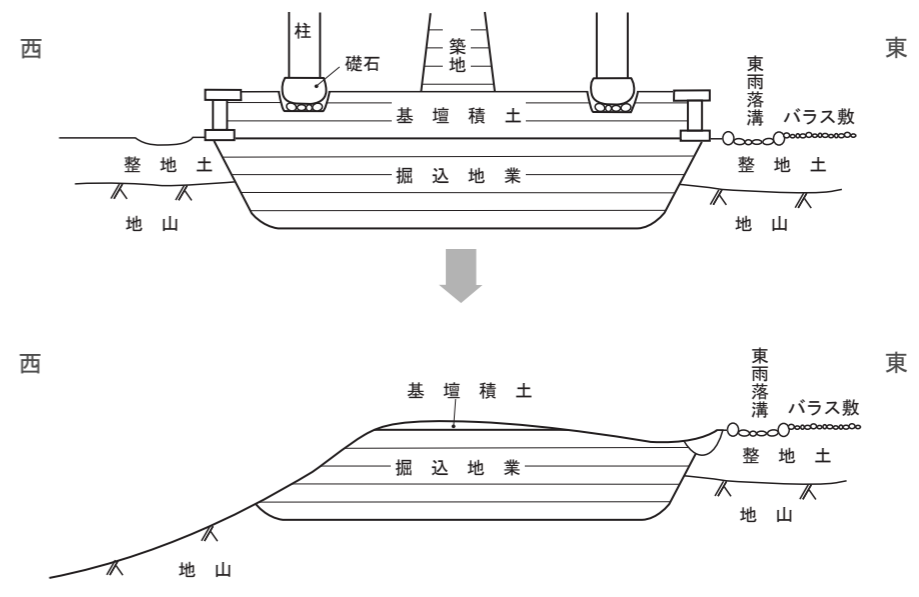
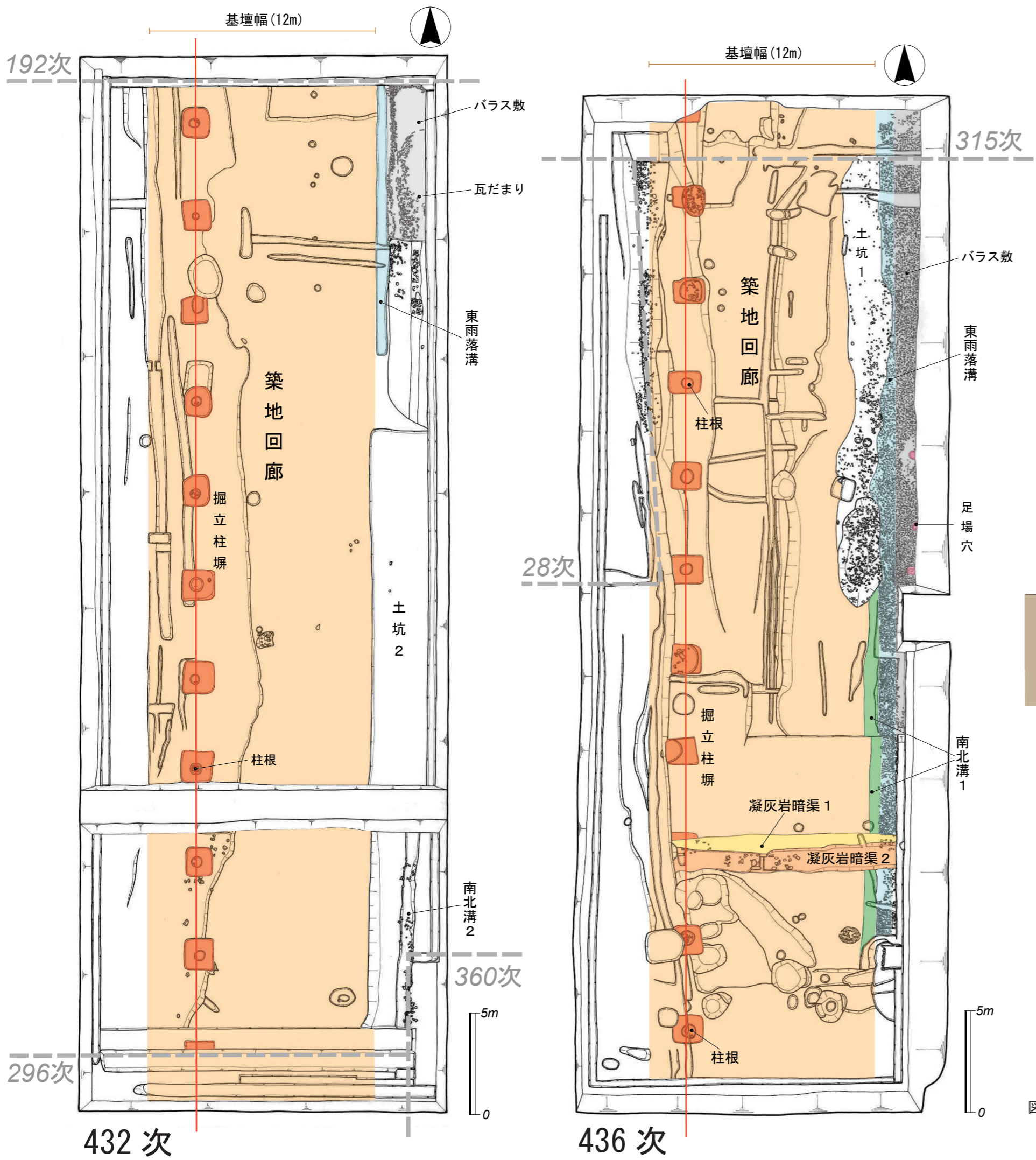


図7 築地回廊と後世の削平（模式図）

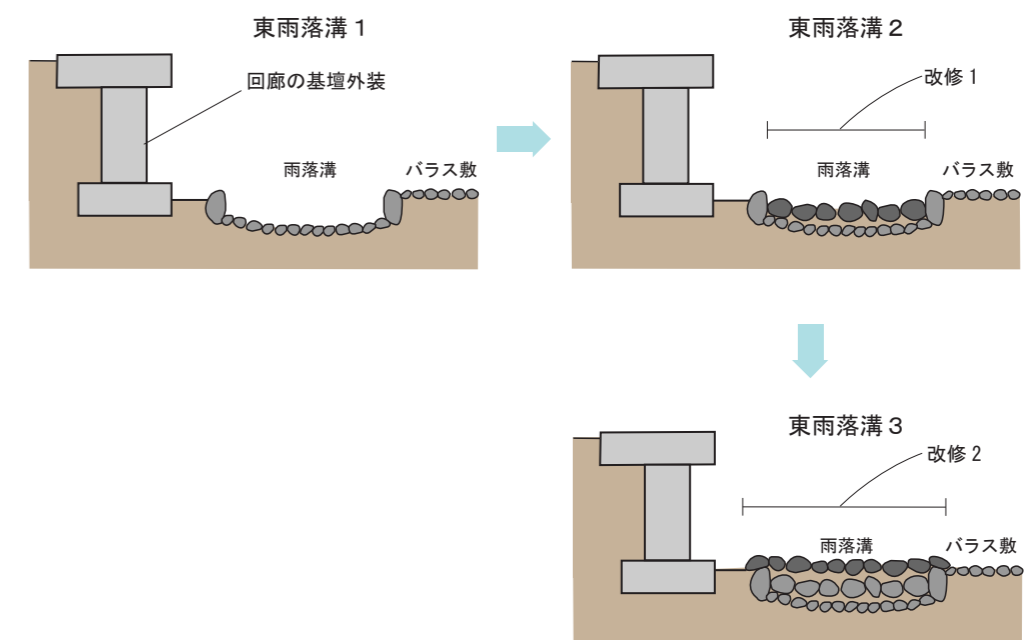


図8 東雨落溝の改修（模式図）

図6 遺構平面図（左：432次調査区、右：436次調査区）